朝鮮族の移動と東北アジアの地域的ダイナミズム
―エスニック・アイデンティティの逆説―

権　　香淑

1．はじめに
2．朝鮮族の歴史における「事実的な移動」
3．経験と記憶の「身体的な移動」
4．移動の動因と考察
5．結びに代えて

1．はじめに

本稿は、「ヒトの移動」（以下、移動とする）[1]という観点から、主に中国朝鮮族（以下、朝鮮族とする）[2]のそれに着目しつつ、東北アジア[3]の地域的ダイナミズムを把握・分析することを目的としている。

1　移動の定義および本稿で導入する二つの概念については、本文（1節の最終段落）を参照されたい。なお、本稿では、あくまでも朝鮮族の移動というエスニシティの包括的な観点を重視する関係上、ジェンダーや階層関係などの変数を入れて論じない。複数の変数を考慮した移動に関する動態分析がより望ましいに違いないが、便宜上、割愛する。

2　朝鮮族という呼称は、1949年以降、中国で少数民族政策が実施される過程において、中国東北部の朝鮮人に付与された少数民族としての名称である。しかし、私が1996年以来行ってきたフィールドワークにおいては、朝鮮族という呼称を称賛的に使うか、あえて使わず「在中コリアン」や「中国同胞」、「僑胞」といった呼称を好んで使うインフォーマントも多く、錯綜した状況がある。この背景には、中国社会および韓国社会における社会的マジョリティによる可視的・不可視的な蔑視に対する異議申立てという意味合い、又はその他の在外コリアンとの平等を主張する当事者の問題意識が反映されているほか、グローバル化に伴い世界各地に移動する朝鮮族の、移動先における社会関係の中での生活実践の数々が存在すると思われる。本稿では、このような「当事者の声」および「生活実践」を踏まえ、呼称に付与された政治的及び社会的なニュアンスを排除しつつ、彼（女）の主体性を尊重する意味合いを込めて使用する。

3　日本の学界や新聞では、しばしば「北東アジア」という用語が使われるが、本稿では、研究対象の主体による呼称、つまり朝鮮族と呼ばれる人々が日常的に使う言葉を重視して「東北アジア」という用語を採用する。

朝鮮族は、従来の移住民族という意味あいも然ることながら、現在もなお、グローバル化の進展とともに再移動を続けている点において、その移動性が際立っていると言われる。それは、延辺朝鮮族自治州（以下、延辺とする）の人口比率が、約 68％（成立当初 1953 年）から約 37％（2007 年）を切った統計数字を挙げるだけでは言い足りない。農村就労人口の転出率が全国平均 9％に対し、朝鮮族は 17 ～ 20％と群を抜いて高いほか、国内トップの人口移動率を記録している[4]。移動先は、北京、天津、上海、青島など国内の沿海都市はもちろん、ロシア、韓国、日本など近隣諸国が著しく、移動形態もサービス業、研修、留学生、就職、結婚などきわめて多様化の様相を呈している。

このような朝鮮族の移動は、一体どのように理解され、説明されるべきなのか。それは、地域的なダイナミズムと相関関係にあるのか。もし、あるとすれば、如何なる形で連関しているのか。それは彼（女）のアイデンティティにどのような影響を及ぼし、逆にどのように地域構造へと反映されているのか。本稿に通底する基本的な問題意識は、このような一連の問いに凝縮される。

従来、朝鮮族の移動というテーマを取り上げてきた先行研究では、一部の例外を除き、改革開放（1978 年）という国内の政策変化や、中韓国交樹立（1992 年）という国際関係の変容による動因の把握・説明が施されてきた。その結果、1990 年代以降のグローバル化に連動する現象として朝鮮族の移動が位置づけられてきたものの、移住民としての移動の歴史を踏まえた総体的な分析には至っていない。とりわけ、地域構造やエスニック・アイデンティティと関連づける考察は皆無で、朝鮮族の移動に関する全体像の把握は、いまだ不十分である。このような認識を前提に、本稿では「朝鮮半島からの移住者が朝鮮族になる移動プロセス、さらには再移動のプロセスにおいて見受けられる態様には、前近代、近代、現代を通したこの地域の政治、経済、社会的な地殻変動の諸相が反映されている」といった作業仮説を設定し、より包括的な理解に努めたいと思う。

本論に先立ち、エスニシティ論と移動論をめぐる方法論的な課題に言及したい。エスニシティ論をめぐる学説は、クリフォード・ギアツの原初的紐帯論に始まる原初主義的アプローチと、グレイサー及びモニハンなどによって展開された手段主義的アプローチに大別される〔関根 1994〕。両者は、歴史的・社会的な構築物としてのエスニシティという側面が考慮されていないという理論的限界が指摘されてきたが、この点につき新たな分析視角を与えたのがフレドリック・バルト〔Barth 1969、青柳 1996〕である。バルトは、エスニシティ集団の境界（boundary）に着目し、エスニシティが置かれた状況、すなわち、歴史、経済、政治状況によって形成される動態としてのエスニシティを見出した。

バルトによれば、エスニック集団を定義づけるのは、固定的な文化ではなく、民族集団

4　岡本雅亨「中国のマイノリティ政策と国際基準」『現代中国の構造変動（第 7 巻）：中華世界 アイデンティティの再編』（第 3 章）、2001 年、104-105 頁。

間における境界の成立とその変容プロセスであり、エスニックな境界は、物理的・本質的なものではなく、社会的・象徴的なものである。そのうえで、バルトは、自己と他者を分け隔てる心理的な基準として、「エスニック・アイデンティティ」の所在も指摘している。これは、家族でもなく国家でもない中間の集団レベルにおけるアイデンティティを見出した、という意味において新たな地平を開いているが、国家や国家間関係によって規定されるエスニシティの状況説明に関しては、その分析効力を発揮しない。そもそもバルトが提示した境界が、自己の外部にのみ「他者」を想定しているためであると思われる。

他方、移動論は、国内／国際移動の先行研究ともに、ヒトの物理的な移動を前提に、地域移動や社会移動の諸現象を分析の対象としてきた。その際の基本的な視座は「単位としてのヒト」をである。そこには、研究上の制約を度外視しても、ヒトを対象化するのみならず他者化する機制が内在しており、観察者ないしは分析者を中心とする、オリエンタリズム的な構造が見え隠れする。言うまでもなく、本稿で取り上げる移動は、モノではなくヒトのそれである。いわば限りある人生を費やして行われるもので、そこには時間的な経過に伴う、ヒトのかけがえのない経験が埋め込まれている。この意味において、従来の移動論が想定してこなかった、移動における身体性の問題を含めて包括的な考察を行う必要がある。

現代社会においては、グローバル化による帝国主義的な権力の介入により、ヘーゲル以来の家族・市民社会・国家（共同体的な規範）の近代的なトリアーデからなる政治経済の構図そのものが溶解している〔姜・吉見 2001：24〕。それは、あらゆる地域、あらゆる個人の身体性にまで及んでおり、現代における移動の把握や分析は、この点を抜きには語れない。ましてや、特権性が失われたグローバル化時代の地域研究[5]においては、自己言及的にならざるをえない。このような現実を直視したうえで、移動の身体性の問題を方法論的課題として位置づけることが望ましい。

そこで、本稿では、移動の態様を記述する際、「事実的な移動」〔中村 1999：37〕と「身体的な移動」という二つの概念を導入する。前者は、「自己の日常生活にあくせくする市井の人間の国境を越える」ヒトの国際移動[6]と、市場経済化に伴う中国国内の移動を含む、事実としての移動を指し示し、後者は、地域間移動や社会移動に伴う文化間移動によって生じるアイデンティティの変容を捉える概念である。後者の「身体的な移動」を捉えることで、従来のエスニシティ論や移動論では想定されてこなかった「自己の中の他者」や、「社会化の内的プロセス」にアプローチしうるように思われる。以下では、「事実的な移動」

5　平野健一郎「グローバル化時代の地域研究：特権性の喪失」西村成雄・田中仁『現代中国地域研究の新たな視圏』世界思想社、2007 年、16-29 頁。

6　「ヒトの国際移動」の定義に関しては、平野健一郎「民族・国家論の新展開：〈ヒトの国際的移動〉の観点から」国際法学会編『国際法外交雑誌』第 88 巻 3 号、有斐閣、1989、3 頁を参照されたい。

を概観し（２節）、「身体的な移動」に焦点をあてたうえで（３節）、移動の動因をめぐる二つ観点を指摘し（４節）、最終的には、東北アジアの地域的ダイナミズムの諸相を浮き彫りにしたい（５節）。

２．朝鮮族の歴史における「事実的な移動」

朝鮮族は、大きな波となって現れる第一の移動（19 世紀後半以降）及び第二の移動（1990 年代以降）の時期区分を問わず、常態的に移動し続けてきた（いる）と言われる。この移動をめぐる歴史的な文脈を把握するために、以下において、マクロの視点から、朝鮮族の移動を前近代、近代、現代に分けて考察しよう。

（1）前近代の移動

まず、近代以前の移動から見てみたい。満洲では、丁卯胡乱（1627 年）で清が朝鮮に攻め入り締結した「江都会盟」にはじまり、「封禁令」の廃止（1875 年から 1885 年まで段階的に廃止）に至るまで、封禁政策が実施された。この事実を根拠に、朝鮮族の移住起源も 19 世紀以降とするものが通説であったと言われる。しかし、封禁政策の実施にもかかわらず、自然災害、生活苦により国境を越える農民は絶えなかった。朝鮮の農民たちは、「朝に耕し、夕べに帰る」、「春に耕し、秋に帰る」、「令厳しければ退き、令ゆるめば戻る」[7]ように国境を越え、豆満江沿岸で農業を営んだ。加えて、一方では二度の戦争により疲弊した朝鮮半島の復興過程における人口増大が、他方では清朝の入関による満洲の人口減少とそれに起因する労働力需要が、朝鮮人を満洲へと引き付けた。移動先が鴨緑江対岸（南満洲）か図門江対岸（間島）かによる政策的かつ地域的な様相の差はあったものの〔鶴嶋雪嶺 1997：67-76〕、その一帯は朝鮮人農民にとって国境を跨ぐ一定の生活圏であるには違いなかった。

農民が新たな耕作地を求める流民的な性格のものとは別の、非自発的移動も存在した。いわゆる「朴氏朝鮮族」の存在が物語る移動である。新羅時代に作られた朴という姓をもつ通称「朴氏朝鮮族」は、丁卯胡乱及び丙子胡乱（1636 年）前後の戦争捕虜として、17 世紀以降、満洲に住み続けた人々の末裔である。新中国成立後、民族識別工作が実施される 1958 年で族籍改正を申し出た後、1982 年に朝鮮族として認定された。すでに同化し、漢族として暮らしていた朴氏一同が朝鮮族であることを名乗りでたことにより、朝鮮族の 19 世紀移住起源に関する通説は大きく塗り替えられることになる〔朴昌昱 1989〕。ここで

7 〈연변조선족자치주개황〉집필소조『연변조선족자치주개황』연변인민출판사 , 1984 년 52 쪽 .〈延辺朝鮮族自治州概況〉執筆班著、大村益夫訳『中国の朝鮮族：延辺朝鮮族自治州概況』むくげの会、1987 年、45 頁。

は、自発／非自発の如何を問わず、国境を越えた多様な移動の所在を確認しておきたい。

清朝政府は、ロシア、イギリスによる満洲への接近や、日朝修好条規（1876 年、韓国では「江華島条約」）をめぐる日本の影響力に対抗し、清朝故地たるこの地域への封禁政策を招墾政策へと一転させる（1875 年）。この政策転換は、後に「中朝商民水陸貿易章程」（1882 年）、「奉天辺民交易章程」及び「吉林朝鮮商民貿易地方章程」（1883 年）の締結、商埠地における朝鮮人の法的認可へと繋がるが、開墾地の朝鮮人には「辮髪易服令」（1890 年）を公布し、その拒否者には入籍及び土地所有を認めないよう施策する。帰化を望まない朝鮮農民の多くは、全体の一割に満たない帰化朝鮮人の下で小作農として働くといった状況が続く[8]。いずれにせよ、章程の締結以降、朝鮮人の法的地位は合法化し、その後の活動はさらに活発化した。

このように、清国・朝鮮の国境たる豆満江を介し、朝鮮農民の生活圏が形成されていたことが確認される。清朝と朝鮮の国境をめぐっては、長らく両国家間の懸案問題であった[9]。しかし、そこで暮らす住民にとっては、あくまでも生活圏内部の利用可能な河川であったにすぎない。国同士が取り決めた厳密な境界というよりは、むしろ両岸に行き来を可能にする共同の場であり自然の恵みであったと思われる。本稿では、国家間における境界の存在にもかかわらず、比較的自由にヒト、モノ、カネ、情報が移動可能な経済・社会的ネットワークを含む生活領域を、さしあたり「跨境生活圏」[10] と呼ぶことにする。

（2）近代の移動

日清戦争（1894-1895 年）、日露戦争（1905-1906 年）を経て、中国東北部をめぐる地政学的な勢力構図が様変わりする中、跨境生活圏は治者の変遷による影響を受けつつも存続する。かつての間島あるいはロシア沿海州は、日本の植民地統治及びアジア政策を背景に、経済的・社会的に朝鮮半島と繋がりつつあった。朝鮮人社会では、咸鏡道の港から輸入された日本製のマッチや綿製品が生活必需品である、という状況が生まれたほか、事情は間島及びロシア沿海州でも大同小異であった。間島が辛亥革命をへて中華民国の領土に、沿海州がロシア革命を経てソビエト政権下に置かれる中でも、朝鮮半島との社会的・経済的なつながりは持続した。ロシア沿海州方面は、スターリンによる強制移住政策（1937 年）によって破壊されたものの〔A･T･ クージン 1998：135-160〕、完全に断ち切られること

8　鶴嶋雪嶺、西重信「朝鮮人の間島入植と日本の朝鮮政策」『関西大学部落問題研究室紀要』第 4 号、関西大学部落問題研究室、1973 年。

9　西重信「中朝国境についての一考察」『北東アジア地域研究（第 14 号）』北東アジア研究学会、2008、41-54 頁。

10　跨境民族の自然経済圏を打ち出した R.A.Scalapino 及び鶴嶋雪嶺の概念的説明を踏襲しつつ、朝鮮族の近現代における移動の諸相を捉える際にも適用しうると考え、提示するにいたった造語である。

はなかった。

「韓国併合」（1910 年）を前後に、朝鮮の「第二の日本化」、中国東北部の「第二の朝鮮化」をめざす日本の一連の政策は、朝鮮半島における流民、破産農民を激増させ、満洲を拠点とする過酷な抗日運動の展開も余儀なくさせた。1907 年における中国東北部在住の朝鮮人総数が 7 万 1,000 人だったのに対し、1943 年には 141 万 4,144 人と約 20 倍に増加しており、人口の推移は右肩あがりの様相を示していた。「満洲国」建国（1932 年）以降は、「在満朝鮮人指導要綱」（1936 年）の制定を受け「鮮満拓殖株式会社」及び「満鮮拓殖株式会社」が設立され、「開拓移民」及び「集団移民」の名の下に、満洲への朝鮮人移民の流れが強化されることになった[11]。

結果として、少なくとも 1990 年代の移動前における中国東北部の朝鮮族居住地分布は、ある種の特徴を帯びることになる。その特徴とは、鴨緑江と豆満江の川に沿う中朝国境線を折り目にして、東北アジアの地図を折り込んでみると明白になるように、その人口分布が出身地別に合せ鏡で映し出されたかのようになっている。つまり、韓国の原籍地と朝鮮族の人口分布が見事に重なり、顕著な対照性を示している。朝鮮半島の北部出身者が鴨緑江や豆満江の対岸に多く移り住んだのに対し、20 世紀に入って顕著になる南部出身者は、耕地を求めて内陸部へと移住した[12]。その分布状況をすべて把握することは困難であるが、韓国では慶尚道出身者の朝鮮族村に関する調査結果が紹介されている[13]。

解放後の混乱を経て、1949 年の中華人民共和国の成立以降、朝鮮族は東北三省に居住する少数民族に編入されることになる。いわば、中国東北部の朝鮮人が、社会主義中国の統治機構に組み込まれることによって、国民であり少数民族である朝鮮族としての歴史が始まることになる。解放から新中国成立まで、実に約 100 万人の朝鮮人が帰郷の途につき、残りの約 100 万人が東北地域に留まった[14]。新中国成立から改革開放までの移動は、中朝

11　韓国の忠清北道出身者によって構成される亭岩村（図們市涼水鎮）の形成過程は、集団移民の歴史的事実を如実に物語っている。2009 年 8 月 10 日付『忠清日報』及びコリアンネット（http://www.korean.net/）のニュース記事より。

12　韓国・慶尚道出身の人々は内陸深くに移住せざるをえなかったため、解放後、道路が渋滞し、情報入手が困難であるなどの状況から、多数の人がそのまま中国に留まった。その結果、原籍が慶尚道にある朝鮮族はおそらく 50 万名を越えるという。2004 年 10 月、黄有福教授（北京中央民族大学）からの聞き取りによる。ちなみに、1930 年代の在満朝鮮人の分布や地域別特徴などについては、外村大「植民地期における在外朝鮮人社会」日韓文化交流基金編『訪韓学術研究者論文集（第 1 巻）』日韓文化交流基金、2001 年を参照されたい。

13　『嶺南日報』の企画連載（2004 年 6 月 -12 月）で、吉林省、遼寧省、黒龍江省、内モンゴル自治区の朝鮮族村を訪問取材した。このシリーズは정근재（2005）として出版されている。なお、私が、2003 年 3 月に訪れた阿拉底村（吉林省吉林市龍潭区）での聞き取り調査でも、同様のことが確認されている。

間での出来事になる。すなわち、朝鮮戦争前後における中国人兵士としての移動[15]に始まり、大躍進、反右派闘争、文化大革命による避難民としての北朝鮮やロシアへの移動、あるいは1959年前後に北朝鮮からの要請を受けた数万規模の移動[16]などである。

跨境生活圏は、このような激動の中でも存続し、その社会的ネットワークは機能していたと考えられる。1960年代前までの北朝鮮は、当時の中国よりも経済的に豊かで食料や生活用品も豊富であった。よって、それまでの朝鮮半島からの中国東北部への方向とは逆の移動があり、そこには、大躍進の経済失策より延辺から北朝鮮に食料を求めるものと、その後に発生した「三年自然災害期」（1960-1962年）における避難的なものとが混在していた。この時期の北朝鮮への移動は、鴨緑江や豆満江を隔てた延辺社会における日常茶飯事であったという[17]。

ただし、解放後、東北アジアの諸国家が近代的な国民国家形成の課題を抱えるとともに、冷戦体制に組み込まれるといった歴史的な展開は、跨境生活圏における人々のつながりを、きわめて部分的なものに押し留めた。東側陣営として社会主義体制を共有する中朝関係を基底とした跨境生活圏は、両国政府による中朝国境条約の締結（1962年10月12日）及び中朝国境議定書の調印（1964年3月20日）に基づく近代的国境の画定とともに変容を迫られる。それは中朝関係が、特殊な血盟関係から普通の国家間関係へと徐々に移行していくプロセスとも重なる。時代が進むにつれ、朝鮮族の跨境生活圏は、政治的な避難圏としての意味合いが濃厚になっていく[18]。

14　そのルートは鴨緑江、豆満江、ロシア沿海州・ハルピンルートとおよそ三つあることが確認されている。李相哲・舟橋和夫・新田光子「〈民族と秩序〉に関する研究序説：中国朝鮮族社会の形成と変遷過程におけるアイデンティティ問題を中心に」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第3号、2000年、281頁。

15　北朝鮮の兵士は約20万名いたと言うが、そのうち、約4－5万名が朝鮮族兵士だったことが知られている。この朝鮮族（中国人）兵士には、中国人民解放軍から朝鮮人民軍に「編入」した部隊と、朝鮮戦争開戦後の「派遣」軍は、連続した一連の過程であることが、近年の研究によって明らかにされている。瀧澤秀樹『朝鮮民族の近代国家形成史序説：中国東北と南北朝鮮』御茶の水書房、2008年のⅡ－Ⅲに詳しい。

16　この北朝鮮への移動については、北京に在住する複数の朝鮮族研究者への聞き取りから判明した。資料的な裏づけとしては、ロシア側の機密公開資料『プザノフ日誌』（1959年3月3日付）より確認することができる。[JRA, File.no. RU-secret 59- 2－2] 중앙일보 통일문화연구소 2002,「1－2. 조선민주주의인민공화국 주재 소련대사의 일기와 대담기록, 1959년 1월 2일 － 12월 19일」『'평양' 주재 소련대사관 비밀문서철（1958년도）』한국현대사통합데이터베이스 http://www.kdatabase.com/ より。このロシア語の資料については、テッサ・モリス＝スズキ教授（オーストラリア国立大学）に教えられ、直接ご提供していただいた。ここに記し、改めて深く感謝の意を表したい。

17　2003年1月19日、「第9回朝鮮族発展学術シンポジウムとワークショップ」（長春）に出席した村長へのインタビューから。

総じて、冷戦期において跨境生活圏を行き来した移動主体は、あくまで朝鮮族社会を構成する多様な文化的背景をもった朝鮮半島の、とりわけ北部の出身者が主であった。すなわち、朝鮮半島北部に親族関係者がいる朝鮮族が、自らの生まれ故郷もしくは親世代の肉親との繋がりという社会的・文化的な繋がりを背景にした移動が通底していた。このことは、逆にいえば、朝鮮半島南部、つまり冷戦体制下の西側陣営たる韓国に父祖の地がある朝鮮族が、地理的な距離という壁に加え、イデオロギー体制の壁に遮られ、親族を頼りに移動することができなかったことを意味する。

（3）現代の移動

ジャンボ・ジェット機の登場により「大量に人とモノを、安い値段で運ぶことができる時代」〔村井吉敬 2006：55〕が現代だとすれば、朝鮮族社会にとって、その幕開けはいつなのか。それは、周恩来による「4つの近代化」宣言（1975 年）でも、鄧小平による「改革開放」路線（1978 年）でも、「冷戦終結」宣言（1989 年）でもない。言うまでもなく、韓国との国交が樹立し、その行き来が可能となった 1992 年以降である。もちろん、国費・私費留学生という形での移動がごく一部では見受けられた。しかし中韓修交以前は、「東北問題」[19] と呼ばれる構造的問題も相まって、市場改革及び対外開放が進まず、「キムチの露天商」[20] をはじめとする行商人が、近隣地域 [21] へと移動する細々としたものが主であった。

冷戦の終焉後まもなく到来した韓国との国交樹立は、朝鮮族の移動に変化をもたらした。かつて朝鮮戦争で戦った「敵国」との国交正常化であり、故国との行き来（離散家族の再会）が可能になった歴史的意義も深く、朝鮮族社会には「ソウルパラム」〔劉孝鐘 1999〕が瞬く間に吹き荒れた。東北三省に居住する朝鮮族は、故国を訪れるきっかけになると同時に、一獲千金を夢見る機会が与えられた。故郷訪問、親族訪問をきっかけに漢方薬の商売を手がける朝鮮族が現れ、徐々に産業演習、産業視察、留学が増え、さらに密入国、偽装結婚など入国の目的も多様化され、韓国内に居住する朝鮮族は、既に韓国社会にとって無視できない社会的集団として可視化されている [22]。

18　1990 年代以降、いわゆる「脱北者」に対する中国政府の対応は、上記の国境に関する規定が前提となっている。

19　加藤弘之「中国東北地域の開発と北東アジア」大津定美編『北東アジアにおける国際労働移動と地域経済開発』ミネルヴァ書房、2005 年。

20　自転車の荷台に手作りキムチを並べて売り歩く独特のスタイルがある。カンヌ映画祭を始め世界の映画祭で 15 もの賞を受賞した韓国映画『キムチを売る女』（原題：芒種）は、その典型的なスタイルを見事に表象している。

21　北朝鮮への移動については、Morris-Suzuki, Tessa, 2007, *Exodus to North Korea: Shadows from Japan's Cold War*, Rowman & Littlefield Pub Inc.（= 2007、田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス：〈帰国事業〉の影をたどる』朝日新聞社、321 頁）を参照のこと。

アジア経済危機（1997 年）以降における韓国企業の中国進出にも、朝鮮族の移動が連なった。中国の首都圏及び沿海都市には多数の韓国人が居住するようになり[23]、その流れに雇用機会を求めた朝鮮族の大規模な移動が見受けられる。この移動が、従来の人口分布（主要居住区は東北三省）を一変[24]させているほか、それまでの単方向的な近代の移動とは異なる、多方向的な現代の移動に拍車をかけている。この流れの中には、例えば、日本の方針転換[25]による朝鮮族 IT 技術者の来日の動向も含まれ、かつてエスニック・ネットワークを回路としていた来日ルート[26]に新たな軌道を与えた。現在進行形の朝鮮族の移動は、伝統的な朝鮮族社会の非可逆的な地殻変動となっている。

このような地殻変動は、朝鮮族の従来の生活空間にも大きな影響を及ぼしている。それは、朝鮮族社会の解体を引き起こす一方、移動の非可逆性が従来の家族形態を維持しつつ、形式的には家族構成員が分散して居住する「家族分散」を招いている〔권태환 2005：69-93〕。しかし、1990 年以降における朝鮮族の世界的な移動と、それに伴う地域構造および労働市場構造の変化は、大規模に分散する移動が朝鮮族社会の解体を招くのではない。既存の地域を元に同質性の高いエスニック社会から、脱地域的にネットワーク化・多元化されており、朝鮮族社会はパラダイム転換に直面しているという〔박광성 2008〕。このような観点に立脚すると、朝鮮族が経験する現在の移動は、従来の生活空間が拡大されたに過ぎず、解体どころか「跨境生活圏の拡大」という意味づけになる。

22　2007 年 8 月 24 日付韓国法務部によると、韓国系中国人（朝鮮族）は 26 万 6,724 人（不法滞在者は 3 万 7,573 人）。

23　これらの中国都市に移り住む朝鮮族及び韓国人の人口移動を調査した黒龍江新聞調査チームの報告によると、2005 年現在、首都圏地域（北京、天津）に約 17 万名（朝鮮族が 4 万 5,000 名、韓国人が 12 万 5,000 万名）、山東地域（青島、威海、煙台）に約 18 万名（朝鮮族 6 万名、韓国人が 12 万名）、華東地域（上海、南京、義烏、杭州）に約 8 万 5,000 名（朝鮮族が 2 万 5,000 名、韓国人が 6 万名）となっており、『東亜日報』で報じられた 2002 年現在の首都圏地域の韓国人数 4 万 6,500 名のみを比較してみても、およそ 3 倍弱ほど増加している状況である。

24　韓国系企業や韓国人移民北京のコリア・タウンと呼ばれる望京地域（北京市朝陽区の郊外）は代表的な例である。

25　IT 革命に伴い「出入国管理基本計画（第二次）」（2000 年）において打ち出された方針、すなわち「国際ビジネスに従事する者の国際移動の円滑化など専門的、技術的分野の外国人労働者の受け入れに関しては、その推進に関して内外の気運の高まりが認められる分野を中心として、国内における受入れのための条件及び環境を確保しつつ、受入れの拡大について積極的に検討していく」とする短期滞在専門職に滞在期間を拡大する方針をさす。

26　日本の朝鮮族に来日事情と実態については、権香淑・宮島美花・谷川雄一郎・李東哲「在日本中国朝鮮族実態調査に関する報告」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所、2006 年を参照のこと。

3．経験と記憶の「身体的な移動」

前述の「跨境生活圏の拡大」に象徴される地殻変動を、一個人の身体的な移動から捉えるために、ここでは、李昌英さん（40 代、男性、社会人、仮名）のインタビュー事例を取り上げる[27]。李さんは、1999 年に就学ビザで来日し、7 年間の留学生活を終え、博士号を取得した後、現在、中国の沿海都市に現地法人をもつ日本企業の専門職として働いている。数多くのインフォーマントの中から、敢えて李さんを取り上げる理由は、ひとえに、李さんの語りに朝鮮族の特殊な社会編成に関わる諸問題が、象徴的かつ顕著に現れていると判断するからである。もちろん、李さんの事例を一般化することは難しいが、少なくとも李さんの語りには、中国における朝鮮族の位置づけや社会的経験が如実に現れていると思われる。

（1）朝鮮族であることの自覚化

李さんは、中国・遼寧省の朝鮮族が散居する、ある村で生まれた。韓国・慶尚道方言交じりの朝鮮語を話す李さんは、朝鮮半島から移住した祖父母をもつ第三世代である。李さんが生まれ育った村は、延辺以外の東北三省にある農村社会で、李さんが育った家のすぐ隣には、塀を隔てて漢族の世帯が住んでいた。つまり、街中の看板に朝鮮語と漢語の表記が立ち並ぶ延辺はもちろん、その他の東北三省にある集住村の環境とも異なっている。ただし、このような環境は、中国全体で捉えると一般的で、「むしろ延辺を取り巻く環境が特殊である」と李さんは考えている。

教師を務めていた父親の仕事の関係上、李さんは、高校まで隣村にある朝鮮族学校に通った。その後、韓国系私立高校に一年間通った後、中国南東部にある大学に進学した。李さんによると、大学進学前に一年間通った韓国系私立高校は、19 世紀末まで朝鮮人のための学校として、日本の植民地時代には「日本人」向けの学校として運営されていた。1945 年 8 月 15 日、解放をきっかけに韓国に戻り、さらにカナダやアメリカ、ヨーロッパなどに移住した欧米系コリアン（同校の卒業生）有志が、1989 年に韓国系私立高校として再建した学校である。

その韓国系私立高校において、李さんが欧米系コリアンの卒業生から度々聞かされたのは、「고국을 지키는 너희들（故国を守る貴方たち）」といった朝鮮族を形容する文句であった。当初、卒業生たちが言う「고국（故国）」が一体どの国のことなのか、李さんには全く理解できなかった。その「고국（故国）」という言葉が古代史に出てくる「高句麗」だ

27　インタビューは、2005 年 10 月に東京都内で行ったインタビューの録音記録とメモに基づいている。本文の内容については、李さんに全文のチェックと掲載のご了承を頂いている。匿名希望であるため本名は記せないが、ここに記して感謝を申し上げる。

と分かったのは、自らが進んで朝鮮半島の歴史を勉強するようになってからである。それまでは中国の一少数民族であることに疑問を抱かなかったが、「故国を守る貴方たち」という新たな他者による名づけに出会うことで、李さんは初めて「朝鮮族であること」を意識するようになった。

李さんが高校まで通った朝鮮族学校では、主に朝鮮語による授業が行われていた。しかし、教科書には朝鮮族の歴史に関する記述が薄く、なかには中国語の内容そのものを朝鮮語に翻訳したものもあった。朝鮮戦争の勃発と中国の参戦に伴い、「抗美援朝」のスローガンが浸透する延辺では、ピョンヤンの朝鮮語を基準に教育を施す旨、朱徳海（延辺の初代主席）によって提起・実施された（1954 年）。あくまでも朝鮮戦争への動員という意味づけが少なくなかったと言われるが、文化大革命が始まる 1966 年まで、北朝鮮の教科書を使用していた朝鮮族学校が多かった。とはいえ、そのような影響下にない朝鮮族学校の教育を受けていた李さんが、「朝鮮族であること」に疑問を抱く余地はなかった。

このような背景のほか、朝鮮族の両親のもと、朝鮮語を母語として育った李さんにとっては、自らが「조선사람（チョソンサラム＝朝鮮人）であること」が自明であり、また李さんと同じような環境で育つ学童が全校生徒を占める学校生活は、ある意味「自然」であった。そのため、家族同士で使う「チョソンサラム」という自称は、学校教育の中に組み込まれている少数民族としての位置づけ（中華民族の一員としての朝鮮族という他称）と矛盾することなく、李さんの中で無自覚に混在していた。「チョソンサラムであること」と「朝鮮族であること」のズレに対する自覚は、さきほど触れた韓国系私立学校の卒業生との出会いをきっかけに、その後の「身体的な移動」へと促されていくことになる。

（2）特殊な歴史的位置づけの知覚化

来日してすでに 10 年以上が過ぎる李さんは、日本で便宜のため永住資格を取得するつもりでいる。近年の中国の発展に伴い、日中間を行き来する経済活動を展開したいと考える朝鮮族留学生の動向〔金 2004：91〕というよりは、むしろ中国国内における朝鮮族の位置づけが、東北アジアの情勢如何に影響される不透明な状況であるため、日本で永住資格を取っておくことが命綱になると判断しているからである。日本国籍の取得も目指すのかという私の質問に対し、「そのようなことは決してない」との返答であった。日本に在住する朝鮮族の中には、便宜上あるいは戦略的な流用として、国籍を取得する人も少なくないが、李さんは、情緒的、感情的に、日本国籍は取得したくないと断言する。

その断言の背後には、父親から聞かされた祖父に対する想いがある。李さんの祖父は、1945 年 8 月 15 日を待たずして他界した。植民地時代の関東軍に属していた李さんの祖父は、終戦直前に自殺した。李さんの父親が 5 歳のときの話しである。父親からは、戦後の家族の立場を考えての行為だったと聞かされたが、真相は闇の中である。当初、淡々とした日本語による李さんの語りは、いつしか朝鮮語に変わり、その声のトーンが高まった。

聞き手の私が、創始改名時代を生き抜いた祖父母の記憶を交えつつ応答すると、その口調はさらに高揚した。しかし、李さんはあまり多くを語ろうとはせず、唯一、複雑な歴史状況に置かれてきた朝鮮族家庭の中でも、「特にうちは複雑である」との認識のみを示した。その一言を語る李さんの苦渋に満ちた表情は、私の脳裏に深く刻まれている。

周知の通り、東北三省が「満洲国」であった時代、朝鮮族は「日本人」であった。とりわけ「五族協和」を謳う「満洲国」内の民族関係で言えば、朝鮮族は日本の序列化政策により、二等市民として位置づけられていた[28]。そこには、解放直後、東北地区の共産党幹部（劉俊秀）が政治的措置を施し解決に導いたとされる「民族矛盾の問題」が混然としていた。李さんと同世代の別のインフォーマントによると、その一連の問題の結果として、中国人（漢族）が使うようになった朝鮮族に対する蔑称―「高麗棒子（gaolibangzi）」や「二鬼子」（erquizi）」という言葉は、現在も完全に死語にはなっていない社会的現実がある。このことは、少数民族をめぐる制度的な条件とは著しく異なる現状を物語っている。

かつて帝国言語であった「日本語」という文化資本が、朝鮮族の日本への移動を方向付ける動因の一つであるとすれば、上記の社会的現実は、都市部の経済発展が目覚しい中国沿海都市へと向かう再移動の流れを減速化させる一つの要因となっている。韓国社会に在住する朝鮮族を考察し、時間の経過に伴い現れるエスニック・アイデンティティの変容パターンを「韓国社会居住志向」と「中国社会居住志向」の強弱の軸によって記した金永基の分類〔金永基 2007：46-50〕を援用すれば、李さんは、自らの社会的経験を、日本への留学生活を通して相対化し、中国への再移動を躊躇するようになったケースとして第Ⅲ象限「脱両社会居住志向」に位置づけられる。

しかし、李さんの場合、その「脱両社会居住志向」というパターンを、さらに「選択型」「被選択型」という類型化によって説明する金の試みは、さほど有効ではない。というのも、マクロな視点に立ち、李さんをめぐる状況を眺めると、それは明らかに「被選択型」に分けられる一方、李さん個人の認知というミクロな観点を重視する場合は、「選択型」との分類が可能になるからである。個人の選択／被選択をめぐる機微が、個々人の多様なケースから類型化されるものというよりは、一個人の人生の節々で、マクロとミクロの次元が複雑に交差し、埋め込まれている。そこには、個人の主体的な選択の問題であると同時に、そのような問題設定では了解不可能な、極めて構造的な問題が横たわっている。

そのようなあり方を煎じつめれば、時間軸に沿って営まれる人間の生を、当事者が如何にして理解し、把握し、創造していくのか、という境地に行き着く。自らのオリジンやルーツを問いつつ自己了解する中で、生の意味を見出す人間の営為と重なろう。ただし、ここで注目すべきは、このような営為が、エスニック・アイデンティティの構築／再構築の機

28 「満州国」に関する日本、中国、韓国の研究動向を踏まえた新たな「満州国」像については、田中隆一『満州国と日本の帝国支配』有志舎、2007 年を参照されたい。

制と不可分であるという点である。つまり、「朝鮮族であること」の自己意識を探求するプロセスは、しばしば自分が生まれ育った環境や故郷、家族など含む繋がりや記憶を懐かしみ、「エスニシティのラベルによってその感情の総体をくくる傾向にある」〔戴エイカ 1999：22〕。「朝鮮族であること」の自己意識は、内的境界に囲われた身体的な移動の中で生成し続けており、エスニック・アイデンティティの構築／再構築をめぐる一つのメルクマールとなっている。

（3）マイノリティとしての意識化

李さんのみならず、中国の少数民族の下で制度的に保障されている少数民族は、すべからく「中華民族」の一構成員として位置づけられる〔費 1989 = 2002〕。これは、移住の性格、出身地、ルートなど異なる社会的背景をもつ東北部在住の朝鮮人が、一律に朝鮮族という一少数民族に包摂される事態を結果的にもたらした。朝鮮族の中には、李さんのように慶尚道の方言を母語とするものもいれば、朝鮮北部の方言を使うものも存在し、それこそ多様であったはずの中国東北地域在住の朝鮮人が、国家による名づけによって一律に包摂された経緯がある。李さんも、そのような少数民族を一律に扱う制度的な枠組みの中で、青春を過ごした。

朝鮮族の歴史を自らが勉強するきっかけを持ち、「朝鮮族であること」をめぐる省察を進めつつ自己了解するプロセスを通して、李さんは、朝鮮族が「中華民族」の一員であるとの認識に疑問を抱くようになった。「チョソンサラム」という自称と「朝鮮族」という他称は、李さんの中で折り合いがつくどころか、後者は全く否定され自己矛盾に落ちいった。また、欧米系コリアンの卒業生を含め、1990 年代以降、頻繁に出会うようになった韓国人が、朝鮮族を含めて「韓民族」と呼ぶことにも違和感を覚えるようになる。「朝鮮族」という他称と同じく、韓国人が朝鮮族を含めて自己中心的に「韓民族」とする呼称も、李さんの中では据わりの悪い他称として意識されている[29]。

李さんは、今後の中国の発展を考えると帰国を模索したいが、漢族の友人から「あなたは朝鮮族」、つまり中国の主流社会には入れないので、なぜ帰りたがるのか分からないと言われ、悩んでいる。その何気ない言葉をきっかけに、李さんは、朝鮮族に向けられた「まなざし」を逆読みするようになった。思えば、中国の国営企業において勤務していた頃、アジアのサッカー試合があった翌朝には、決まって同僚から中国と韓国のどちらを応援したかを問われた。同僚たちが自分を同じ中国人だと思っているのであれば、そのような質問が出てくるはずがない。しかし、現実的には、朝鮮族が漢族と全く同じような中国人と

29　ただし、李さんは「한민족（韓民族）」と同じ音で表記も同様の「一つの民族（하나의 민족＝한 민족）」というハングルの意味であれば、自己矛盾に陥ることなく受け入れられるかもしれない、とさりげなく付け加えた。

して扱われることは決して多くない。このことを、李さんは敏感に感じ取るようになった。

中国における朝鮮族の立場や状況は、たとえば韓国や日本という別の国に行ったとしても、大差はないと李さんは認識している。そして、その問題性を、李さんは歴史問題との関連から捉えている。「東北工程」[30] に象徴される中国の動向に対し、そのような動きが歴史の歪曲だとする韓国や北朝鮮の反発がある。古代史をめぐる正当性や真正性の応酬劇は、国際政治や外交問題に発展する可能性を否定できない。とはいえ、このような二国家間・多国家間の争いは、結局、それぞれの境界に跨って生活している最も弱い立場の者にリスクがかかることになる。その意味で、朝鮮族のあり方は、東北アジアの政治経済情勢とは不可分で、そこに関心を寄せざるをえない構図がある。相対的に安定的な生活を送っている李さんではあるが、諸々の状況認識から、依然として今後の状況は不透明であると判断している。

このように、東北アジアの過去の歴史及び現在の歴史認識の問題は、李さんの現在をさまざまな形で規定している。李さんの語りから伺えるアイデンティティのありようは、決して意図したものではなく、東北アジアの過去の歴史、現在の位置づけによって常に構造化されてきた結果である。構造化とは別の言い方をすれば、制度による他者化と社会関係による他者化という二つの他者化を含むものであるが、李さんの身体的な移動は、中国における朝鮮族の親元で生れたそのときから、東北アジアのある種の歴史や社会関係に規定されていた。李さんは、東北アジアの負の歴史の「当事者」になることを選択したのではなく、気づいたときには「当事者」となっていた。

しかも、それは中国の学校教育を通して得た気づきではなく、中国の諸制度や社会関係の中の朝鮮族の位置づけを、日本への留学という移動を通して客観視できるようになり、初めて得られたものである。そして、東北アジアの諸国家が、グローバル化の対応として国民国家としての諸政策を強化すればするほど、今後も、「当事者」にならざるを得ないことを自覚的に語っている。中国における社会関係や生活体験からくる経験と記憶の往復運動の中で、李さんは、日々、朝鮮族として行為遂行的に人生を歩んできたが、グローバル化に伴う多様な他者との出会いによって、「当事者」性が再構成されている。東北アジアの諸々の動向は、李さんにとって、現在と未来の生き方に影響を及ぼす重要な変数となっている。

4．移動の動因と考察

これまで考察した朝鮮族の事実的な移動と身体的な移動の動因は、それぞれどのような

30 「東北工程」とは、1996 年に中国社会科学院において中国東北部・旧満洲における歴史研究を重点研究課題とすることが決定されたプロジェクトで、2002 年から研究が本格的に開始された中国政府主導の歴史研究の一つである。その中で、高句麗が中国の地方政権であったという見解が発表され、直ちに韓国・北朝鮮から抗議があったほか国際的な討論も行われている。

観点から説明しうるのか。以下では、事実的な移動を捉える二つの観点を示し、その両義的な意味と、身体的な移動との絡み合いを考察しよう。

（1）構造的な観点と文化的な特性

周知のとおり、中国東北部への朝鮮人の移動は、自然災害という生態学的な影響、植民地支配下における朝鮮半島の政治的な不安定性、そして日本の植民地政策に伴う破産農民の増加に象徴される貧困状況が、歴史的背景となっていた。そこには、19世紀末、朝鮮半島に生れ落ちた個々人の生を大きく規定するいわば構造的暴力〔Galtung 1969=1991〕〔川田侃 1998：66-70〕[31]が大きく起因していた。生活苦や貧困といった移動要因は、1996年以来継続しているフィールドワークにおいて私が出会った多くの朝鮮族老人の語りから共通して聞かされた話である。私の聞き取り調査内容からはもちろん、中国東北部に移り住むようになった個人史に関する多くの語りからも多々見受けられる[32]。

構造的暴力に伴う朝鮮族の移動は、朝鮮半島が日本の植民地支配から解放された1945年８月15日以降も途切れることはなかった。ヤルタ会談における「極東密約」（1945年２月）を根拠に日本に宣戦布告（1945年８月８日）したソ連軍が、中国東北部の「解放」をもたらしたプロセスにより、この地域における一時期な無政府状態が生じた。しかし、ソ連軍の撤収に伴い、事実上、山海関[33]以南の南満洲は国民党が、以北の北満洲は共産党が所轄することになった。この両地域に約200万人ほど居住していた朝鮮人に対する統治は、それまでの「満洲国」政府から、国共それぞれの異なる政策にとって代わり、朝鮮半島への移動（帰還）や定着の様相が、全く異なる結果をもたらすことになる。

朝鮮人を駆逐及び送還の対象と捉えた蒋介石率いる国民党は、東北部在住の朝鮮人を「韓橋」と見なし、財産の没収をはじめとする弾圧政策を施した。一方、1928年から朝鮮人を少数民族の一員として認めてきた共産党は、土地改革を推し進め、便法的に二重帰属を

---

31 「構造的暴力」とは、ノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトゥングが提示した平和研究の基本概念で、雑駁に紹介すると、戦争がない状態が平和ではなく、暴力がない状態が平和であり、その暴力の中には①戦争やテロなどを指す「直接的暴力」、②貧困や差別などを含む「構造的暴力」、③構造的暴力が制度化された「文化的暴力」がある。帝国主義的関係においては、国内的／国際的にも支配層は相互に強い連携を保持しているのに反し、被支配層は相互に連携の道を持たず疎外され、社会的不公正や経済的不平等が存在する社会的構造を言う。

32 中国朝鮮族青年学会編『聞き書き「中国朝鮮族」生活誌』社会評論社、1998年を参照のこと。

33 中国万里の長城の東端にある要塞で、中国の歴史的地名である。河北省と遼寧省との境にあり、女真、契丹に対する国防の要とされ天下第一関と称された。漢代には臨榆関と呼ばれ、明代に山海衛が置かれてから山海関と呼ばれるようになった。清になってから名前が臨榆県と元に戻されたが、それ以降も山海関と呼ばれた。40代後半以上の高い年齢層のインフォーマントから多く聞かされた「안쪽사람」（内側のヒト）「바깥사람」（外側のヒト）という朝鮮族社会における独自の表現は、この山海関を基準とした言い回しであるという。1996年８月における延吉での聞き取り調査より。

認めるなど対照的な政策を施した。9 割以上が貧困層の農民であった在満朝鮮人は、混沌とした状況の中で、生きる工夫を強いられた。朝鮮族は生活環境が少しでも良い地域へと移動を繰り返しつつ、中国共産党の土地改革によって与えられた田畑の主となり、義勇軍に属していた朝鮮人軍人を除く中国東北部在住の朝鮮人が、朝鮮族として中国の一国民に編入されることになった〔李海燕 2009〕。

さらに、朝鮮族をめぐる構造的暴力は、新中国成立後の朝鮮族の言語教育や民族政策にも色濃く反映されていた。たとえば、建国初期の基本法である「共同綱領」では、民族語である朝鮮語の使用や文化の継承が保障されていたにもかかわらず、実際には「国民統合教育」が強化され、朝鮮の「僑民思想」と「二つの祖国概念」を打破する政策が施された〔権寧俊 2005〕[34]。文化大革命期は言うまでもないが、それ以前の整風運動期にも、多くの知識人たちが「地方民族主義者」とのレッテルを貼られ、批判の対象となった。最も「書かれていない」改革開放以前の受苦的なプロセスは、辛亥革命以降、今日に至る中国の特殊な民族主義の発展過程〔이진영 2006〕を踏まえることで、初めて、その作為性、必然性が浮かび上がると思われる。

他方、文化的特性という側面からの説明も可能である。すなわち、①そもそも朝鮮族が朝鮮半島からの移住民であるということ、②朝鮮半島北部及び中国東北部には、鴨緑江・豆満江に跨る地続きの跨境生活圏が形成されていたこと、③比較的自由な往来が可能であった跨境生活圏が遮られるかのように、中国・北朝鮮・旧ソ連など近代的国家の成立による国境管理が強化されたこと、④にもかかわらず、前近代における旧来の跨境生活圏を土台とする移動は頻繁に行われていたこと、⑤したがって、観察者の目にはしばしば「新しい移動」と移る現象も当事者にとっては自明のことであり、これらの意味において朝鮮族の移動性には、「移動の文化」[35] という側面が存在するという見方である。

このような朝鮮族の特性は、人類学の研究領域が多くを明らかにしている。19 世紀後半以降の中国東北部における異民族関係を踏まえ、新中国成立以降における朝鮮族と漢族関係を取り上げる研究によると、朝鮮族は漢族に比べて土地に対する執着心がなく、「機会さえあれば少しでも暮らしやすい場所へ移住しようとする〈移民的習性〉」を保っているほか、「そのことが朝鮮族をして、社会的立場の上昇に対する強い執念を維持させている」〔韓景旭 2001：26〕。また朝鮮半島からのヒトの移動過程を東アジアにおけるグローバル化に意味づける研究では、中朝露の国境付近における前近代から近代へのヒトの移動

34　権寧俊「朝鮮人の〈民族教育〉」から朝鮮族の〈少数民族教育〉へ」『文教大学国際学部紀要（第 15 巻 2 号）』2005 年、201 頁。

35　この点については、ごく普通のヒトびとがかなり遠距離でも気軽に国境を越えるという移動の行動様式が、実は特殊なものではなく、ヒトびとの生活の根幹にある行動様式であり「カルチャー」であるいう指摘に通じるものがある。三木亘「人間移動のカルチャー：中東の旅から」『思想』1975 年 10 月号、岩波書店、1975 年。

が、身体化されていた移動たるハビトゥスの実践として記述されている〔原尻秀樹 2005：87〕。

韓国社会におけるヒトの移動要因を、文化的な価値とその意味から考察する議論も見逃せない〔伊藤亞人 2008〕[36]。具体的には、朝鮮王朝社会と日本の幕藩体制における農村社会との差を念頭におき、現在の韓国人の移動を動機付けるものとして、韓国社会における人物の評価基準、とりわけ職業や活動に関する貴賤観念などを浮きぼりにする。また、その文化、社会的な展開及び儒教思想との関連を探っている点で大変興味深い。私の聞き取り調査においても、韓国人の移動と同様に、貴賤観念が移動の動因となっていることが散見されるからである。その傾向は、教育の貴志向において、大卒者が中国平均で１万人中122 名いるうち、漢族が 126 名、朝鮮族は 381 名と３倍以上を示している統計データ（2000 年の中国センサス）からも読み取れよう。

（２）両義的な意味とエスニック・アイデンティティ

朝鮮族の事実的な移動を捉える二つの観点を示したが、これらは、決して対立するものでも、反目するものでもない。むしろ、構造的暴力と文化的特性とが複雑に絡み合う連続において、朝鮮族の移動ダイナミズムがあると言えるだろう。その絡み合いを歴史的かつ地域的に捉えると、「中国型帝国」による朝貢･柵封制度下のアジアが、グローバル化（西欧化）に組み込まれるといったプロセスと重なる。それは、「西洋の衝撃」、「日本の衝撃」など「外発的な」玉突きの衝撃が合い重なる一方で、中国の非中心化と東洋の再編という朝鮮半島の「内発的な」近代化をめぐる論点に接合される。さらに、国交樹立以降の韓国人との「衝撃的な出会い」によって、さらに幾重にも屈折した様相が示される。

西欧「近代」が日本を経由し、中国・朝鮮半島を含むアジアのグローバル化へと繋がる特殊な構造は、朝鮮族の移動プロセスを少なからず方向付けてきた。それは、前近代における跨境生活圏の境界を基軸に、朝鮮族の分布状況が朝鮮半島の出身地と対照的であったことを想起すると、分かりやすい。その対照性とは、東北アジアに近代国家が成立するプロセス、つまり、鴨緑江及び豆満江の意味合いが、生態学的な「河川」としてではなく、近代における政治学的な「国境線」として強化されていくプロセスとも対応している。換言すれば､間島と咸鏡道の領域における前近代的な「国境（くにざかい)」が近代的な「国境（コッキョウ)」に変化していく経緯である。総じて、東北アジア地域は、「朝貢体制」及び「華夷秩序」における中華世界を中心とした国際関係の階層的な「周辺」から、近代ヨーロッパ起源の主権平等的な国際関係における「周辺」への変遷プロセスを辿ることになる。

かかるプロセスの中で生み出されてきた東北アジアの地域構造は、朝鮮族の現在の有り

36　韓国・朝鮮文化研究会『韓国朝鮮の文化と社会』第７号、2008 年の特集を参照のこと。

様をも深く規定している。それは、通時的には、朝鮮人、韓人、日本人、「満洲国臣民」、中国人、共時的には、朝鮮族（中国）、韓国系中国人または在中同胞（韓国）、在日外国人（日本）といった、他称性の変遷に象徴される。この様々な他称には、東北アジア諸国家における国益の異相が反映されており、このことは、朝鮮族の帰属意識にも現れる。したがって、国家間対立が顕著なこの地域にあって、跨境民族である朝鮮族は、この地域が抱える構造的矛盾を映し出す存在であると同時に、国家間を媒介する橋渡し的な存在でもある、といった両義的な側面を見て取れる。朝鮮族の複合的なアイデンティティ、とりわけエスニック・アイデンティティは、東北アジアにおける構造的な位置づけの裏返しとも言えよう。

このような両義的な意味や位置づけは、朝鮮族がエスニック・マイノリティとして構造化される特殊な外的要因でもある。この外的規定性を、身体的な移動という社会的プロセスを通して、内的に獲得していくプロセスが、李さんの語りに反映されている。エスニック・アイデンティティの自覚と少数民族としての当事者性は、実は、中国の教育制度下において、国民教育と少数民族教育が不可分一体のものとしてカリキュラム化されており、そのこと自体が問題の根源を構成している。つまり、「朝鮮族であること」という意識を、国民／少数民族教育の一環として養う機制が問題となっており、李さんの自己意識は、中国での社会生活、日本への留学プロセスを通して、相対化の方向性を示している。

多元一体型統合を国是とする中国では、ナショナル・アイデンティティへの動員が、同時に少数民族としてのエスニック・アイデンティティの自覚を促す。さらに、中国・朝鮮族という二重性が東北アジアの特殊な構造に位置づけられる場合、それは、必然的に多重性を帯びる。事実的／身体的な移動を経験する多くのインフォーマントは、中国ではもちろん、日本や韓国、海外への移動先においても大同小異であると声を揃える。否、海外の移動先においては、ホスト社会との関係における錯綜した状況があり、「どこにいようが朝鮮族のマイノリティ性は変わらない」という自己認識が生成する。そして、東北アジアの特殊な地域構造において、「朝鮮族であること」が自覚されるのである。

5．結びに代えて

以上、本稿は、従来のエスニシティ論や移動論が照らす範囲を越えた脈略から、朝鮮族の移動を捉えなおす試みであった。具体的には、前近代、近代、現代という、マクロな視点から「事実的な移動」を考察しつつ地域的ダイナミズムと関連づける方法と、一個人に内在するミクロな視点から「身体的な移動」を帰納的に捉える方法とを組み合わせることで、朝鮮族の移動を総体的に把握するよう努めた。結果、移動からとらえる地域的ダイナミズムはもちろん、エスニック・アイデンティティが自覚される局面からも地域的ダイナミズムを帰納的に説明しうる可能性が示されたように思われる。

朝鮮族の移動は、東北アジアにおける地域構造の変動と密接に絡み合いながら敢行され

た。それは、貧困と災害、植民地と革命、解放と敗戦など極端に展開し、今もなお冷戦構造が残存する両義性が顕著な20世紀の東北アジアに埋め込まれているのみならず、現在も進行形である。加えて、地域的ダイナミズムの根底には、朝鮮族に内在する「移動の文化」がそれらを後押し、エスニック・アイデンティティが再構築されている点も散見される。その意味において、本稿で取り上げた朝鮮族の移動およびその動向は、ミクロ、マクロの視座を組み合わせた東北アジアの動態を捉える視座から、包括的な地域研究を模索するにあたり、ひとつの試金石となりうるのではないだろうか。

本稿に、従来のエスニシティ論や移動論における、理論的な限界を補完する方向性があるとすれば、それはエスニック・アイデンティティが地域構造の中で生成され自覚されていくプロセスを踏まえ、自己内部にまで掘り下げた視点から、移動現象の包括的な理解を目指した点にあろう。精神分析家E.H.エリクソンが、一生涯を通して事実的／身体的な移動を繰り返しつつアイデンティティの概念を編み出したことを想起すると〔Friedman 1999〕、不可避の方法論的模索であったようにも思われる。身体的な移動については、さらに多くの事例、とりわけ世代ごとの事例を集めた比較・実証研究が求められるが、それは、グローバル化によるヒトの移動の活性化が強まることすれ弱まらない今日の、時代的な要請でもあるに違いない。

※本稿には、参考文献に挙げた〔権 2010〕および〔権 2011〕の一部を、大幅に加筆・修正したものが含まれる。

参考文献

Ａ・T・クージン著、岡奈津子・田中水絵共訳
1998『沿海州・サハリン近い昔の話：翻弄された朝鮮人の歴史』凱風社
青柳まちこ編・監訳
1996『「エスニック」とは何か：エスニシティ基本論文選』新泉社
伊藤亞人
2007『文化人類学で読む日本の民族社会』有斐閣選書
川田侃
1998『平和研究』（川田侃・国際学Ⅲ）東京書籍
姜尚中・吉見俊哉
2001『グローバル化の遠近法：新しい公共空間を求めて』岩波書店
金永基
2006『クロスボーダー移動と地域社会の再構築：中国朝鮮族の移住・適応・エスニック・アイデンティティの再形成』富士ゼロックス小林節太郎記念基金編
権香淑
2010『グローバル化と〈朝鮮族〉』村井吉敬編『アジア学のすすめⅡ（社会・文化論）』弘文堂
2011『移動する朝鮮族：エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社
関根政美
1994『エスニシティの政治社会学：民族紛争の制度化のために』名古屋大学出版会

戴エイカ
1999『多文化主義とディアスポラ：Voices from San Francisco』
鶴嶋雪嶺
1997『中国朝鮮族の研究』関西大学出版部
韓景旭
2001『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店
原尻秀樹
2005「東アジアのグローバリゼーション再考：朝鮮半島からの移動」『（アジア遊学 81）東アジアのグローバル化』勉誠出版
李海燕
2009『戦後の「満洲」と朝鮮人社会：越境・周縁・アイデンティティ』御茶の水書房
村井吉敬
2006『グローバル化と私たち：国境を越えるモノ・カネ・ヒト』岩崎書店
劉孝鐘ほか編訳
1999『ソウルパラム 大陸パラム』新幹社
中村牧子
1999『人の移動と近代化：「日本社会」を読み換える』有信堂
권태환
2005『중국조선족사회의 변화：1990 년 이후를 중심으로』서울대학교출판부
박광성
2008『세계화 시대 중국조선족의 초국적 이동과 사회변화』한국학술정보
정근재
2004『그 많던 조선족은 어디로 갔을까』북인
이진영
2006「중국 민족주의의 발전과 21 세기 동아시아 평화」『국제평화』제３권 ２호대한정치학회
費孝通
1989『中華民族多元一体格局』中央民族学院出版社（2002、西澤治彦解説・訳「費孝通著『中華民族の多元一体構造』」『武蔵大学総合研究所紀要』No. ２）
朴昌昱
1989「試論朝鮮族遷入及其歴史上限問題」『朝鮮族研究論叢』第一、二号、延辺人民出版社
Barth, Fredrik
1969, *Ethnic Groups and Boundaries; The Social Organization of Culture Difference*, Waveland Press
Galtung, Johan
1969, “Violence, Peace, and Peace Research.” *Journal of Peace Research*, Vol.6
Lawrence, Jacob Friedman
1999, *Identity's Architect; A Biography of Erik H.Erikson*, Scribner（ローレンス・J・フリードマン、やまだようこ・西平直監訳　2003『エリクソンの人生：アイデンティティの探求者』［上］［下］新曜社）

キーワード　グローバル化　朝鮮族の移動　エスニック・アイデンティティ　事実的／身体的な移動　東北アジア　跨境生活圏

（KWON Hyangsuk）